

『吉備国の語源・黄蕨について-3』

『吉備(黄蕨)国・高嶋宮伝承の解析』

日本先史古代研究会 会員 丸谷 憲二

1 はじめに

『日本書紀・古事記』による日本神話は高天原・出雲・日向神話に分かれている。吉備高嶋は日向の高千穂、大和の橿原と並立すべき日本神話の聖地である。戦後の古代史学・比較歴史学の津田左右吉は、応神天皇以前の話を含めたフィクションと考えた。井上光貞は文献史学と考古学と民俗学の三つの学問を組み合わせて歴史を研究することを目的として国立歴史民俗博物館を構想した。

岡山県では神武天皇が、吉備国(黄蕨国)の高嶋宮に3年間(古事記:8年間)とどまり東征の軍備を整うとされている。吉備国(黄蕨国)高嶋宮の主要候補地は吉備国(黄蕨国)に4ヶ所ある。

『陶山系譜』と『先代旧事本紀大成経七十二巻本』により高嶋宮伝承を解析したい。

『陶山系譜』

天照国照彦火明命 → 天香山命 越後国蒲原郡 伊夜日子神社

宇摩志摩治尊 石見国安濃郡 物部神社

神武天皇東国発向之為從日向日向移備中ノ国兵官軍ニ付趣。則御武将宇摩志摩治尊之軍虜ナリ依而。皇居之名神嶋宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄ル。皇居地名也。三年之神遊兵根御船之數整内黄蕨(備中古名)之勇猛御方ニ馳集。宇摩志摩治尊内裏為メニ守護之ヨツテ司所ヲ物部ト名シ給フハ是ヨリ始ル。武士をモノノフト訓スル。利ヨリ非起ルニ即物部別号ニ下ル由此城地今ノ要砂築クニ洲濱ヲ城之外ト堀ニ用ユルニヨリ諸人呼フ洲山城ト。天皇叡山聞而洲山ト給ヒ亦陶山ト下シ給フ也。八杉田邊原澤山高辻奥村右之氏陶山家ヨリノ別家武功軍記ニ有テ世ニ知ルノ所ナリ陶山ノ定紋洲濱ニ寄而洲濱ニ定メル。古城跡備中小田郡要砂村。古書ニハ西砂トアリ。宇摩志摩治尊ヨリ七十五代備中守高信寿永三年(1184)屋島合戦ニ通盛教経トモニ勇々數働後長洲赤間關ニ而討死。

『先代旧事本紀大成経七十二巻本』 武田本

○「卷第十六 天孫本紀下」より

「大歳(神)在乙卯三月甲寅朔己未、從入黄蕨国兮、起行館居御、是曰高嶋宮、積

^{みとせ}三年^{かじ}、而^{かて}楯^{かて}舟^{かて}楫^{かて}蓄^{かて}兵^{かて}食^{かて}也、将^{ひとたびあ}欲^{ひとたびあ}以^{ひとたびあ}一^{ひとたびあ}舉^{ひとたびあ}而^{ひとたびあ}平^{ひとたびあ}天下^{ひとたびあ}也、大^{おおあなむちのみこと}己^{おおあなむちのみこと}貴^{おおあなむちのみこと}尊^{おおあなむちのみこと}（**大國主尊**）^{おおあなむちのみこと}児^{おおあなむちのみこと}木^{おおあなむちのみこと}勝^{おおあなむちのみこと}彦^{おおあなむちのみこと}命^{おおあなむちのみこと}
 神^{おおあなむちのみこと}（^{おおあなむちのみこと}木^{おおあなむちのみこと}俣^{おおあなむちのみこと}神^{おおあなむちのみこと}・^{おおあなむちのみこと}大^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}主^{おおあなむちのみこと}神^{おおあなむちのみこと}の^{おおあなむちのみこと}御^{おおあなむちのみこと}子^{おおあなむちのみこと}）、又^{おおあなむちのみこと}黃^{おおあなむちのみこと}蕨^{おおあなむちのみこと}津^{おおあなむちのみこと}彦^{おおあなむちのみこと}命^{おおあなむちのみこと}、為^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}首^{おおあなむちのみこと}在^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}頭^{おおあなむちのみこと}見^{おおあなむちのみこと}（^{おおあなむちのみこと}沖^{おおあなむちのみこと}繩^{おおあなむちのみこと}島^{おおあなむちのみこと}の^{おおあなむちのみこと}ク^{おおあなむちのみこと}ニ^{おおあなむちのみこと}ガ^{おおあなむちのみこと}ミ^{おおあなむちのみこと}。名^{おおあなむちのみこと}護^{おおあなむちのみこと}市^{おおあなむちのみこと}以^{おおあなむちのみこと}
 北^{おおあなむちのみこと}の^{おおあなむちのみこと}山^{おおあなむちのみこと}岳^{おおあなむちのみこと}地^{おおあなむちのみこと}帯^{おおあなむちのみこと}と^{おおあなむちのみこと}離^{おおあなむちのみこと}島^{おおあなむちのみこと}を^{おおあなむちのみこと}さ^{おおあなむちのみこと}す。）天^{おおあなむちのみこと}尊^{おおあなむちのみこと}、作^{おおあなむちのみこと}敬^{おおあなむちのみこと}與^{おおあなむちのみこと}二^{おおあなむちのみこと}児^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}（^{おおあなむちのみこと}日^{おおあなむちのみこと}向^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}児^{おおあなむちのみこと}湯^{おおあなむちのみこと}郡^{おおあなむちのみこと}）君^{おおあなむちのみこと}命^{おおあなむちのみこと}、（『^{おおあなむちのみこと}易^{おおあなむちのみこと}經^{おおあなむちのみこと}』「^{おおあなむちのみこと}大^{おおあなむちのみこと}君^{おおあなむちのみこと}命^{おおあなむちのみこと}あり^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}
 を^{おおあなむちのみこと}開^{おおあなむちのみこと}き^{おおあなむちのみこと}家^{おおあなむちのみこと}を^{おおあなむちのみこと}承^{おおあなむちのみこと}く」天^{おおあなむちのみこと}子^{おおあなむちのみこと}を^{おおあなむちのみこと}指^{おおあなむちのみこと}す。）奉^{おおあなむちのみこと}饗^{おおあなむちのみこと}奉^{おおあなむちのみこと}事^{おおあなむちのみこと}、自^{おおあなむちのみこと}造^{おおあなむちのみこと}陳^{おおあなむちのみこと}具^{おおあなむちのみこと}、集^{おおあなむちのみこと}兵^{おおあなむちのみこと}調^{おおあなむちのみこと}陳^{おおあなむちのみこと}、進^{おおあなむちのみこと}奉^{おおあなむちのみこと}皇^{おおあなむちのみこと}軍^{おおあなむちのみこと}、于^{おおあなむちのみこと}時^{おおあなむちのみこと}行^{おおあなむちのみこと}宮^{おおあなむちのみこと}庭^{おおあなむちのみこと}一^{おおあなむちのみこと}
 夜^{おおあなむちのみこと}生^{おおあなむちのみこと}八^{おおあなむちのみこと}蕨^{おおあなむちのみこと}、其^{おおあなむちのみこと}長^{おおあなむちのみこと}一^{おおあなむちのみこと}条^{おおあなむちのみこと}二^{おおあなむちのみこと}尺^{おおあなむちのみこと}、其^{おおあなむちのみこと}太^{おおあなむちのみこと}二^{おおあなむちのみこと}尺^{おおあなむちのみこと}五^{おおあなむちのみこと}寸^{おおあなむちのみこと}、其^{おおあなむちのみこと}色^{おおあなむちのみこと}濃^{おおあなむちのみこと}黃^{おおあなむちのみこと}、國^{おおあなむちのみこと}有^{おおあなむちのみこと}人^{おおあなむちのみこと}神^{おおあなむちのみこと}、云^{おおあなむちのみこと}黃^{おおあなむちのみこと}光^{おおあなむちのみこと}命^{おおあなむちのみこと}、即^{おおあなむちのみこと}朝^{おおあなむちのみこと}奏^{おおあなむちのみこと}曰^{おおあなむちのみこと}、此^{おおあなむちのみこと}草^{おおあなむちのみこと}異^{おおあなむちのみこと}
 草^{おおあなむちのみこと}也、当^{おおあなむちのみこと}治^{おおあなむちのみこと}八^{おおあなむちのみこと}州^{おおあなむちのみこと}祥^{おおあなむちのみこと}、是^{おおあなむちのみこと}天^{おおあなむちのみこと}為^{おおあなむちのみこと}瑞^{おおあなむちのみこと}、軍^{おおあなむちのみこと}卒^{おおあなむちのみこと}競^{おおあなむちのみこと}之^{おおあなむちのみこと}、故^{おおあなむちのみこと}道^{おおあなむちのみこと}此^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}号^{おおあなむちのみこと}黃^{おおあなむちのみこと}蕨^{おおあなむちのみこと}國^{おおあなむちのみこと}」

※ 写本であり書写ミスの可能性有り。斜体は調査中。

2 吉備國の行館伝承

2.1 『日本書紀』との比較分析

『日本書紀』では「日本書紀卷第三 神武天皇即位前紀 乙卯年春三月」とあり、吉備國（高嶋宮）を設置したのは神武天皇とされている。

【日本書紀卷第三 神武天皇 即位前紀 乙卯年春三月 原文】

乙卯年春三月甲寅朔己未。徒入吉備國、起行館以居之。是曰高嶋宮。積三年間、脩舟楫、蓄兵食、將欲以一舉而平天下也。

【読み下し】

乙卯年の春三月甲寅の朔己未。吉備國に徒りて入りましき。行館を起りて居す。是を高嶋宮と曰ふ。三年積る間に、舟楫を脩へ、兵食を蓄へて、將に一舉げて天下を平けむと欲す。

3 大歳神と「太歳干支」

『古事記中巻』は「吉備の高嶋宮に八年坐しき」のみで年号表記は無い。『日本書紀』のいくつかの条には「是年太歳〇〇年」として、「太歳干支」が記載されている。「太歳干支」とは、十二年で太陽の周りを一巡する歳星（木星）の運行と逆方向に向かう化想の天体のことである。太歳紀念法（歳陰紀念法）と呼称されている。太歳甲寅を西暦年に換算して紀元前666年としている解説書がある。しかし、「史実としての年号は、太歳干支とは無関係な年代にある」と倉西裕子は報告している。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』「卷第十六 天孫本紀下」の吉備國行館記録は「大歳在」で始まる。大歳神とは、『古事記・神代記』の説明では「速須佐之男命が大山津見神の娘、神大市比売に娶つて生まれられた御子である。宇迦之御魂神は兄弟神」である。大歳神は五柱の御子神をもうけられた。

『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の「先代旧事本紀卷第十七 神皇本紀上巻上 神武天皇」にも、

「^{おおとし}大歳在」の記録が3ヶ所ある。

^{おおとし}大歳在_二於甲寅_一、冬十月丁巳朔辛酉、天皇親師_二諸兄諸皇子等_一、・・・

^{おおとし}大歳在_二己未_一、二月辛卯朔丙辰、導臣命率_二地来目部_一、・・・

^{おおとし}大歳在_二於庚申_一、秋八月癸丑朔戊辰、天尊将立_二正妃_一、・・・

3.1 ^{おおとし}大歳（大年）神社

姫路市東部に^{おおとし}大歳（大年）神社が30社、中部に10社が集中している。兵庫県には神戸を中心に^{おおとし}大歳神を祀る^{おおとし}大歳（大年）神社が380社ある。^{おおとし}大歳（大年）神社とは^{おおとし}大歳神を祀った神社である。

『延喜式神名帳』には山城国乙訓郡、大和国高市郡（二座）、和泉国大島郡、遠江国長上郡、但馬国二方郡、岩見国那賀郡（島根県江津市都野津町の式内社^{おおとし}大歳神社）に計七座の^{おおとし}大歳神社が記録されている。

現在も^{おおとし}大歳（大年）神社は、中部以西に広く分布しているが東日本には比較的少ない。

岡山県の^{おおとし}大歳神社は、真庭郡新庄村と笠岡市馬飼・絵師・金浦・飛島にあり、^{おおとし}大歳天神社が浅口市鴨方町本庄にある。^{おおとし}大歳天神社は、最初は兄弟神である宇迦大神の山上に鎮座し二度目に遷座した社地に^{おおとし}大歳という字が残っている。

4 年号 「^{きのとうきのえ・とら}乙卯甲寅」の解析

『魏志倭人伝』によれば、「日本には3世紀当時においてさえ暦法が無く、いわゆる自然暦を用いていたことが推察される」と大谷光男は報告している。『日本書紀』欽名天皇14年（553）六月の条が暦博士・易博士の初見である。隅田八幡宮の人物画像鏡（仿製鏡）の銘文には西暦383年説と443年説がある。明確なのは^{たいさいきのえ・とら}太歳甲寅を西暦年に換算した紀元前666年説は間違いである。

^{きのとうきのえ・とら}乙卯甲寅は年号の記録である。^{きのとう}乙卯は60通りの組合せができる干支の一つ。干支の組み合わせの52番目で前は甲寅、次は乙卯の年となる。西暦年を60で割って55が余る年が乙卯の年である。陰陽五行では十干の乙は陰の木、十二支の卯は陰の木で比和である。（比和:同じ気が重なると、その気は盛んになる。その結果が良い場合には益々良く悪い場合には益々悪くなる。）

内田正雄は「日本書紀の暦日は5世紀の半ば頃までは儀鳳暦（平朔）により、以後は元嘉暦によるものであることを始めて明らかにしたのは小川清彦氏である。」と報告している。

『^{せんだいきくじほんきたいせいきょう}先代旧事本紀大成経七十二卷本』が記録された622年迄の「^{きのとうきのえ・とら}乙卯甲寅」は『日本書紀暦日原典』では下記となる。神武天皇即位前記の紀元前665年は神話上の年号である。^{てんのう}天皇とは7世紀以後の日本の君主の公式称号である。天皇号使用以前は^{おおきみ}大君号である。この記録が史実であれば考古学上の知見よ

り吉備国滞在の年度を推定できる。

神武天皇即位前記	紀元前 665 年 03 月	[神話上の年号] (暦法は伝来していない。)
充恭 40 年	西暦 451 年 04 月	儀鳳では甲寅とある。
継体 02 年	西暦 508 年 02 月	儀鳳では甲寅とある。
欽明 25 年	西暦 564 年 12 月	儀鳳では甲寅とある。

『日本書紀暦日原典』「日本書紀・儀鳳（平朔）・元嘉 異同表」より抜粋

「西暦 445 年以後の元嘉・儀鳳（平朔）の比較」より抜粋

4.1 日付 「己」・六日

源（水戸）光圀修の『大日本史』は「乙卯の歳、三月六日己未」と表記している。五日とした文献もある。「己」（き）は、十干の 6 番目である。陰陽五行説では土性の陰に割り当てられている。「己」の字は三本の平行線を形取ったもので、そこから、条理が整然としている状態という意味となる。十干では、植物が充分生長し形が整然としている状態として、「己」は 6 番目に宛てられた。十干を順位づけに使った場合には、「己」は 6 番目の意味となるが、「己」まで使われることはほとんどない。

4.2 時刻 「未」・未の刻は午後 2 時を中心とする約 2 時間

「未」（み）は十二支のひとつ。通常十二支の中で第 8 番目に数えられる。前は午、次は申である。未年は、西暦年を 12 で割って 11 が余る年が未の年となる。未の月は旧暦 6 月。未の刻は午後 2 時を中心とする約 2 時間。未の方は南南西よりやや北寄り（南西微南）の方角である。五行は土気 陰陽は陰である。「未」は『漢書』律曆志によると「昧」（暗いの意）で、植物が鬱蒼と茂って暗く覆うこととされ、『説文解字』によると「味」（あじの意）で、果実が熟して滋味が生じた状態を表しているとされる。後に、覚え易くするために動物の「未」が割り当てられた。

4.3 朔と平朔

平朔とは地球から見て太陽と月が同方向にある時、太陽と月の黄経が一致する時を朔と言う。太陽が天球上を通る道が黄道で、黄経とは黄道上で測る経度である。朔の時は地球から月は見えない。この朔の時刻を含む日が朔日で暦月の第 1 日となる。朔から次の朔までを 1 朔望月といい、朔日から次の朔日の前日である晦日（つごもり）までが 1 暦月である。朔日【ついたり】と呼称する。

黄光命は方位神である太歳神の別称と考える。

5 吉備國の行館伝承の考察

『古事記・日本書紀』では吉備國行館きびのくにかりみや傳承は神武天皇傳承としている。『先代旧事本紀大成経七十二卷本』では大歳おおとし在とある。どちらの記録が史実を記録しているかを検証しなければならない。

笠岡市の馬飼おおとし（大字は大歳）・絵師・金浦・飛島おおとしに大歳神社があり、近くの浅口市鴨方町本庄おおとしに大歳天神社がある。浅口市鴨方町本庄鎮座の大歳天神社の最初の鎮座地が兄弟神である宇迦大神の山上である。

山上より眺め最適の地を探したの意である。他の高嶋傳承地の近くには大歳神社は無い。つまり、「大歳おおとし在」とは、「大歳おおとし」が先回りしてお待ちしていたと解すべきであり、大歳神は方位神である太歳神たいさいと考察すべきである。

吉備國の行館は笠岡市神島・高嶋となる。『神明帳』には大歳神社おおとしのかみのやしるは六社登録されている。石見国安濃郡・岩見国那賀郡（島根県大田市川合町川合）より神島かりみやに行館を設置され3年間駐在し活動された。笠岡市に陶山という地名がある。陶山地区の西隣は広島県福山市である。『陶山系譜』は、「皇居之名神嶋宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄ル。皇居地名也。」と笠岡市の神島としている。重要なのは皇居の名前を高嶋宮ではなくて神嶋宮こうのしまのとしていることである。

私は笠岡市飛島の大歳神社に注目した。大飛島の小字が「洲ノ本」であり、小飛島の小字が「洲ノ濱」であり『陶山系譜』の洲濱である。大飛島の洲の付根近くに多数の土器が発見され、それが遣唐船（8～9世紀頃）の海路祈願祭祀用のものであることが明らかとなり国指定重要文化財（大飛島祭祀遺跡出土品 308点）となっている。「海の正倉院」と呼ばれるほど多彩な出土品である。

6 吉備国高嶋宮たかしまのみや傳承の従來說

吉備国高嶋宮たかしまのみや傳承の従來說として4説有る。「沼隈郡説・神島説・宮浦説・高島山説」である。

高嶋宮たかしまのみやは、日本書紀によれば神武天皇が3年間（古事記:8年間）駐在された場所である。神武天皇は、太歳甲寅の年10月5日に高千穂を出発し軍舟を率いて東征の途にのぼられた。豊後海峡を通り宇佐・筑紫・安芸に寄られ翌年3月6日に吉備国高島かりみやに行館たかしまのみや（高嶋宮）を造り駐在された。吉備国にて天下を平定するために舟を準備し武器を調達し食糧を蓄えた。戊午つちのえうまの2月11日東に向かい出航した。後に大和にて即位された。比較検証のために従來說を紹介したい。

6.1 広島県沼隈郡説

郷土史家・濱本鶴資はまもとかくひん（濱本清一はまもとせいいち）が、明治45年（1912年）に処女作『吉備高島考』を出版し、神武天皇聖蹟吉備高原宮址を黄光命の出身地として備後東岸なりと考証した。兼田高州（明逸）は田島はタカ島の訛りしものであるとして沼隈郡の南部沿岸にある田島村の王太子宮と主張した。

6.2 笠岡市神島説

世良長造は「神武天皇時代の高嶋は、今の神島と高嶋を併称せるものと思わねばならぬ」と主張した。神島神社は延喜式での名神大社との伝承があり、近くに高嶋があり王泊（船の停泊地）という地名も有る。高嶋は、面積 1.05km²、周囲 5.9km、標高 84m、人口 127 人（平成 20 年 3 月 31 日現在）の島である。笠岡港より南約 8km（陸地からは 3km）の瀬戸内海国立公園にあり、白石島の北、神島の南に位置している。高嶋は昭和 19 年に名勝に指定された。三洋汽船で笠岡港から 35 分、神島外港から 10 分。太古から人の住んでいる島で縄文時代や古墳時代の遺跡が確認されている。内海航路の重要な寄港地の一つで古歌にも多くうたわれている。陰陽石と石舞台が知られている。

神^{かみうらやま}卜山は神武天皇が高島滞在の折、吉凶を占った山と伝えられ、山頂には「高島行宮遺跡」と題した自然石の巨碑がある。展望台からは笠岡諸島をはじめ、瀬戸内海の大パノラマが広がる。また、神^{かみうらやま}卜山へ向かう遊歩道沿いには、神武天皇が天神にお供えする水を汲んだと伝えられる「^{まなひ}真名井」が残っている。高嶋神社は神武天皇が滞在した吉備国高嶋行宮跡と伝えられる神社である



「神島の高島行宮遺跡」



「神武天皇宮」「神武天皇社」

昭和 31 年の岡山県高島遺跡調査委員会『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』で梅原末治（京都大学文学部）は、「今回の高嶋に於ける王泊、黒土両遺跡の調査は当初地元の人々が寄せた所謂神武天皇東征と結びつくものとした期待からすると、それとは全くかけはなれた結果に終わった。」と笠岡市高島説を完全に否定している。

6.3 岡山市児島湾・^{みやうら}宮浦説

岡山市の児島湾、児島水道に浮かぶ高嶋がある。今は無人島である。島の南端に高嶋神社が鎮座している。ここが高嶋宮址である。高島及び南岸宮浦には神武帝駐師の故跡という伝承がある。高嶋神社は宮浦を向いて建っている。1967 年（昭和 42）9 月 1 日から 10 日間、瀬戸内考古学研究所の正式な発掘調査が実施されている。鎌木義昌（岡山理科大学教授）は「岩盤山頂上に巨石を中心とした祭祀遺構が

あり周辺部から 5 世紀末から 6 世紀初頭の^{まがたま}勾玉等の石製模像品や^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器が発見されている。祭祀期間は比較的短期間である」と報告している。他にも、日本製の小型重圏文鏡や鉄剣、甲冑の断片等が発見されている。



備前児島・高嶋の高嶋神社

皇紀 2600 年記念事業の一環である昭和 17 年文部省発行の調査報告書『神武天皇聖蹟調査報告』では児島郡甲浦村字高島（岡山市児島湾の高島）を聖蹟伝説地としている。聖蹟伝説地とは「地点または地域について江戸時代を降らない時代に記録せられた口碑伝説をもち、価値ありと認められるもの」である。その記録とは、寛永年間（1624～1644）の『備前国絵図』と天和元年（1681）山田定経撰の『遊高嶋記』に神武東征のとき舟をめぐらせ兵食をたくわえた地として名が記録されていることである。戦前の皇国史観では論争に終止符が打たれた形になっている。

6.4 岡山市賞田の高島山説



岡山市賞田の吉備高嶋宮^{たかしまのみや}

岡山市賞田は龍の口山の南麓である。両備バス旭川荘行「脇田入口」下車徒歩 5 分。高島山説として『高嶋村史』の水藤千代造説が知られている。

- ① 往古より高嶋と称し、神明帳所載の高島神社現存すること。
- ② 水陸の要衝に当れること。
- ③ 出雲との交渉に絶好の地形なること。
- ④ 三軍を容るべき地帯を有し、糧食、飲料水を得るに兵備を整ふるに適好地たること。
- ⑤ 吉備の中心地にして、吉備上道臣三野臣の土着蕃街の地なること。
- ⑥ 付近広大なる古墳の存すること。
- ⑦ 吉備の中心地たるを以て、中古、吉備大宰、備前国府の所在地たりしこと。

7 まとめ

- ① 『日本書紀』とは『先代旧事本紀大成経七十二巻本』の要点のみを表記した記録である。
- ② 『古事記・日本書紀』では吉備國きびのくにに行館かりみや（高嶋宮たかしまのみや）を設置したのは神武天皇すやまとしている。『陶山系譜』に「皇居之名こうのしまの神嶋宮かみト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄ル。皇居地名也。」とある。
- 『先代旧事本紀大成経七十二巻本』には大歳おおとし在とある。笠岡市の馬飼・絵師・金浦・飛島おとしに大歳神社があり、近くの浅口市鴨方町本庄おとしに大歳天神社がある。浅口市鴨方町本庄鎮座の大歳天神社の最初の鎮座地が兄弟神である宇迦大神の山上である。山上より眺め最適の地を探したの意である。
- 他の高嶋伝承地の近くには大歳神社は無い。つまり、「大歳在」とは「大歳」が先回りしてお待ちしていたと解すべきであり、大歳神は方位神である太歳神たいさいと考察すべきである。
- つまり、吉備國きびのくにの行館かりみや（高嶋宮たかしまのみや）は笠岡市の神島宮となる。
- ③ 源（水戸）光圀修『大日本史』の校注には「高嶋宮 今の備中国小田郡高嶋の王泊の地、其の旧址なりと云う」とある。『大日本史』は水戸光圀死後の正徳5年（1715）の藩主綱條による命名である。「本朝史記」・「国史（倭史）」とも呼ばれている。
- 今回の調査結果は水戸光圀説と世良長造説の補説である。
- ④ 新納泉にいなる（岡山大学教授）は、吉備の古墳時代を10期に分け前方後円墳を分析している。「I期（3世紀後半）には南部と北部では規模の差に無い。それが次第に南部の古墳が大型化して中心が現れる。5期（5世紀前半）の造山古墳は一人勝ち。それが7期（5世紀後半）には中心が備前と備中に分かれ、次の8期（5世紀後半～6世紀初頭）には1期に戻ったようになる。これは雄略朝期のいわゆる吉備の反乱の時期で、やはり何か大きな事が起きたと考えざるをえない。この5期と8期が吉備の歴史の大きな画期といえる。」と報告している。
- ⑤ 吉備國きびのくにの行館かりみや（高嶋宮たかしまのみや）伝承は、神武天皇即位前記 紀元前665年〔神話上の年号〕では無く、西暦451年、508年、564年の史実となる。新納泉説にいなるより考察し508年（継体2）の史実伝承と推定する。新納泉説にいなるの補説である。

参考文献

- ①『天皇家のふるさと日向をゆく』梅原猛 2000 新潮社 ②『国史大事典9』昭和63年 吉川弘文館
③『日本史史料総覧』村上直・高橋正彦監修 昭和61年 東京書籍 ④『姫路の神社』兵庫県神社庁姫路支部編著 2005 神戸新聞総合出版センター ⑤『東備郡村志 吉備群書集成(二)』昭和45年 歴史図書社 ⑥『岡山県通史』永山卯三郎 昭和5年 岡山県通史刊行会 ⑦『絵師鎮守 大歳神社270年記念大祭』パンフレット平成24年 ⑧『女王国邪馬台国の謎に迫る』若狭哲六 1991 古代先史古代研究会 ⑨『古代の暦日』大谷光男 昭和51年 雄山閣出版 ⑩『釈註大日本史一』源（水戸）光圀 修 昭和39年 大日本普及会 ⑪『天皇の並外れた長寿と在位期間 日本書紀の真実 紀年論を解く』倉西裕子 2003 講談社 ⑫『日本書紀暦日原典』内田正雄 昭和53年 雄山閣 ⑬『日本古代神祇事典』吉田和典 平成12年 中日出版社 ⑭『真庭郡誌 全』大正12年 真庭郡役所 ⑮『鴨方町史 本編』平成2年 鴨方町 ⑯『岡山県大百科事典下巻』昭和55年 山陽新聞社 ⑰『吉備高島考』濱本鶴賓はまもとたくひん（濱本清一）1912年（明治45）【沼隈説】 ⑱『吉備高島宮研究志』

料』兼田高州 吉備高島史跡顕彰会 1938(昭和 13)【沼隈説】 ⑲『吉備高島宮趾概説』吉備高島宮趾顕彰会編 吉備高島宮趾顕彰会 1935(昭和 10)【笠岡説】 ⑳『吉備高島宮趾』世良長造 高島宮趾顕彰会 1936(昭和 11)【笠岡説】 21『吉備高島備中神武天皇記』立神勝彦 1937(昭和 12)【笠岡説】 22『吉備高島宮趾と瀬戸内海国立公園』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1938(昭和 13)【笠岡説】 23『吉備高島考証』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1939(昭和 14)【笠岡説】 24『吉備高島考證』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1939(昭和 14)【笠岡説】 25『続吉備高島考証』世良長造 吉備高島宮趾顕彰会 1940(昭和 15)【笠岡説】 26『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和 31 年 岡山県高島遺跡調査委員会【笠岡説】の否定 27『笠岡市史 第一巻』昭和 58 年 笠岡市【笠岡説】 28『皇国地誌(明治 9 年編) 笠岡市史 史料編上巻』平成 11 年 笠岡市【笠岡説】 29『笠岡市史 地名編』平成 16 年 笠岡市【笠岡説】 30『参修高島考』水原岩太郎 昭和 15 年【児島説】 31『吉備高島』出版年不明 邦美堂印刷【児島説】 32『郷土に伝はる吉備高島宮趾』ほか 新聞切抜 渡辺知水編 出版年不明【児島説】 33「備前高島遺跡について」鎌木義昌『サヌカイト創刊号』1968 年 岡山理科大学考古学部編【児島説】 34『吉備高島宮考』光岡石太郎 吉備高島宮聖跡顕彰会 1937(昭和 12)【高嶋山説】 35『吉備高島行宮考』鈴木定一 1937(昭和 12)【高嶋山説】 36『高島村史』水藤千代造 1937(昭和 12)【高嶋山説】 37『神武天皇東遷経路 吉備国 高島宮』<http://www.geocities.jp/mb1527/N3-15-1tousen6.html> 38『第 229 回 神武天皇の東征経路 その 2』<http://yamatai.cside.com/katudou/kiroku229.htm> 39『高島神社』<http://kouminkan.city.okayama.okayama.jp/takashima/shiseki/ssk04.html> 40『吉備 高島の宮 磐座』<http://www10.ocn.ne.jp/~veeten/iwakura/okayama/takashima.html> 41『岡山市史 古代編』昭和 37 年 岡山市役所 42『岡山県史 原始古代 I 第二巻』平成 3 年 岡山県 43『岡山県史 第 17 巻 年表』平成 3 年 岡山県 44『神宮史年表』神宮司庁編 平成 17 年 戒光祥出版 45『新古代日本史』山内邦比古 平成 3 年 46『おかやま歴史塾 26 第 5 期 時代と人々④巨大古墳の主たち』新納泉 2008 年 10 月 13 日山陽新聞 47『岡山県史 第 19 巻 編年史料』昭和 63 年 岡山県 48『日本文学体系 1 古事記祝詞』倉野憲司他校注 昭和 33 年 岩波書店 49『新潮日本古典集成 古事記』西宮一民校注 昭和 54 年 新潮社 50『日本古典文学大系 67 日本書紀上』井上光貞他校注 昭和 42 年 岩波書店 51『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』平成 11 年小笠原春夫校注 神道体系編纂会